

# アートプロジェクトと直島の教育や子育て環境の 関係性についての考察

— 住民の主体的な取り組みに着目して —

A Discussion of Urban Development in Synergy with Art Projects  
Focusing on Naoshima's Proactive Community Development

吉本華\* 薬袋奈美子\*\*  
Hana YOSHIMOTO Namiko MINAI

**要約** 日本では1990年代後半から、アートプロジェクトが展開され始めた。直島ではアートプロジェクトを契機に、地域住民の文化活動が活発化した。三菱マテリアルも直島の経済や人口維持を支える要であることに加え、アートの取り組みにより移住者が増加したことに対し。このような直島のまちづくりの背景には、単に福武財団を中心としたアートプロジェクトが持ち込まれたことだけでなく、従前から行っていた学校教育や、小さな自治体である利点を生かして行政が住民の意見を気軽に取り入れながら町政を柔軟に行ってきたという姿勢がある。全国各地でアートプロジェクトとまちの活性化を結び付けた取り組みが展開しているが、それを成功に導くためには、受け入れる地域の住民と行政の持っている力や取り組み姿勢と、相俟ってプロジェクトが進められることが重要である。

**キーワード**：まちづくり、アートプロジェクト、サイトスペシフィック・アート、アートツーリズム、ベネッセアートサイト直島

**Abstract** Art projects began to develop in Japan in the late 1990s. On Naoshima, art projects have led to an increase in cultural activities by local residents. Mitsubishi Materials Corporation also played a key role in sustaining the economy and population of Naoshima. In addition, the number of migrants has increased due to art initiatives. The art projects have also contributed to an increase in the number of newcomers. The background to this type of town development on Naoshima is not simply the fact that art projects centered on the Fukutake Foundation were brought in, but also the attitude of the town administration, which has been flexible. The administration has capitalized on the schooling that was conducted previously and the small size of the municipality, and it readily incorporates the opinions of the local residents. Initiatives linking art projects and town revitalization are being developed in many parts of the country, but in order for them to be successful, they must be implemented in conjunction with the drive and commitment of the local residents and the administration in the host area.

**Key words** : Community development, Art projects, Site-specific art, Art tourism, Benesse Art Site Naoshima

---

\* 家政学研究科住居学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Housing and Architecture  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture

## 1. はじめに

### 1-1. 研究背景と目的

日本では1990年代後半から、アートプロジェクトが展開され始めた。現代アートを活用した地域再

生の取り組みが全国で増加した中で、その代表的な成功事例として取り上げられるのは「西の直島、東の越後妻有」と呼ばれる2つのアートサイトである。これまでに、多くの来訪者を魅了する理由や<sup>13)</sup>、直島の来訪者が住民の意識に与える影響や<sup>12)</sup>等多くの研究がされてきている。アートツーリズムは、ただの経済的地域振興のみならず、地域活性化の手段としても有効である。これは、現代アートを利用したまちづくりにおいて、地域住民の積極的参加が必要不可欠であるということが作用していると考えられる。本研究においては、直島を対象として、アートプロジェクトを地域住民が主体的に利用しているのか、直島のまちづくりにどのように利用しているのかについて調査を行う。

本研究では、文献等の情報に加え、公益財団法人福武財団アート部門エデュケーション担当の藤原氏、一般社団法人キッズポート代表理事山岸氏、2019～2021年度直島小学校校長である榎校長への2021年6月ヒアリング調査結果に基づき、考察を行う。

## 1-2. 直島の概要

直島は、香川県香川郡に属する町であり、瀬戸内海の27の島々からなる。直島は香川県よりも岡山県に地理的に近い。直島本島の面積約8.13km<sup>2</sup>、直島本島の周囲16km、令和3年度時点での人口は3,047人である。全盛期1950年代の人口は約7,800人程であった。

直島は、花崗岩とその風化土に覆われる丘陵性の島であるため、農業には不向きな土壌であった。明治時代には海上交通の要衝として海運業や製塩業、漁業が営まれていたが、大正時代に農業、漁業の不振に見舞われた。そのため三菱合資会社の銅精錬所を誘致することになった。当時、煙害や環境汚染を回避するため、また海上運搬に適しているという理由で離島に精錬所を移転する傾向があった。結果として、直島は高度経済成長期に三菱マテリアルの企業城下町として栄えたことで、島外からの人口の流入が激しくなり、現在に至るまで島の人口維持を支える大きな役割を担っている。

また1960年頃から三宅親連町長(当時)が行政として、「自主的産業振興対策と観光事業の基礎確立」を掲げ、観光事業の誘致を行っていた。1960年に藤田観光が「日本無人島株式会社」を設立し、滞在型観光地の建設を構想した。琴弾地海岸にフジ

タ無人島パラダイスをオープンしたが、瀬戸内海が国立公園特別地域であるため、厳しい規制によりホテル建設の許可を得ることができなかった。また、いざなぎ景気の終了、オイルショックによる建設資金の枯渇により、日本無人島株式会社による直島の観光事業は事実上中止された。その後、1987年に藤田観光、日本資源、日本無人島開発の3社と、のちのベネッセである福武書店との間で所有地の一括譲渡契約が成立し、福武書店による直島開発が決定した。そして、1988年から福武総一郎が「直島文化村構想」と称した「直島開発計画」が始まった。翌年には直島国際キャンプ場をオープンし、2004年に「ベネッセアートサイト直島」を始動させた。瀬戸内国際芸術祭は、2010年から3年に一度瀬戸内海の島々を会場に開かれており、直島も会場の一つである。

## 2. 本村地区における住民のアートの取り組み

### 2-1. 三宅親連元町長による直島町の地区計画

三宅親連元町長は昭和35年度の当初予算の大綱説明の中で、重点施策のひとつに「自主的産業振興対策と観光事業の基礎確立」を挙げた。また直島を、北部、中央部、南部と周辺島嶼部の3つの地区に分け、以下の目標像を示している。

- ・北部…製錬所を中心とする関連諸産業のよりいっそうの振興をはかり、町の経済の基盤とする。
- ・中央部…住民生活の場とする。
- ・南部と周辺島嶼部…瀬戸内海随一を誇る自然景観と、町の歴史的な文化遺産を大切に保存しながら、これらを観光事業面に活用し、観光を町の産業の一つの柱にしたい。

直島の産業における「三菱マテリアルと観光」という二本柱は、ここに明確化された。1960年の夏には、積極的に臨海学校や青少年向けのキャンプ、講習会などを誘致し、一応の成果を上げた。こうした誘致の受け入れ先として提供したのは、学校や役場支所などの公共施設であった。ここで、大規模な施設整備の必要性、つまり大資本の誘致の必要性が判明したと考えられる。

### 2-2. 本村地区における住民主体の文化活動

「住民生活の場」である直島中央部の居住地として、主に宮浦地区、本村地区、積浦地区の三地区がある。宮浦地区は香川や岡山からのフェリーが発着

する港である海の駅「なおしま」がある地域であり、イベントの開催される年を中心に、島外から店を開きに来る人もいる等、商業活動が盛んである。積浦地区は漁港として知られている地区になっている。

本村地区は昔ながらの街並みがあり、カフェなどの飲食店と民宿をはじめとする宿泊施設の分布も多い。(Fig.1) また、家プロジェクトによる空き家のアート作品化等、住民の生活に身近な場所に芸術家や観光客が来る場所となっているため本稿ではこの地区の住民主体の文化活動を考察する。アートプロジェクトは福武財団による取り組みであるが、各住民がアート活動に参加する仕掛けとして、町が補助する形で、住戸毎にデザインの異なるのれんの設置や、屋号を同じデザインの表札につくり、各住戸に設置するものがある。

本村地区にはこののれんや屋号を軒先に設置する家庭が多く存在する。これは 2001 年に開催された「スタンダード」展の関連イベントによる「のれんの路地」という作品がきっかけになった住民活動である。岡山県真庭市勝山在住の染織家の加納容子氏が、のれんをかける家の方々取材し、各々の家の由来や特徴を反映しながら絵柄と色、素材を決め、制作した。この「のれんの路地」は地域住民に影響を与え、展示終了後も同様にのれんを利用した景観まちづくりを行おうと意見が集まった。2004 年には本村のれんプロジェクト実行委員会が設立され、現在は名称が変わり、直島のれんプロジェクト実行委員会としてプロジェクトは続いている。また直島町から補助金もあるが、毎回補助金の申請に多数の応募があり、のれんを設置したくても設置できない人がいるという。<sup>注1)</sup> 屋号は、2001 年に「直島屋号プロジェクト」としてスタートした。昔本村地区には同姓が多く、その混同を避けるために屋号はつけられたという。屋号の由来は、祖先の名前、職業や商号、家の位置など、家によって様々である。その屋号を平仮名で表記し、金属プレートをくり抜いたものを家のインターホンやポストのすぐそばに設置しているのが、直島屋号プロジェクトである。(Fig.2)

本村地区の昔ながらの街並みが残っている住宅街で、2001 年に開催された「スタンダード」展でのアートプロジェクトの影響を受け、住民主体で屋号やのれんの文化活動を行っていることがわかった。直島南部では、ベネッセハウスミュージアム周辺に

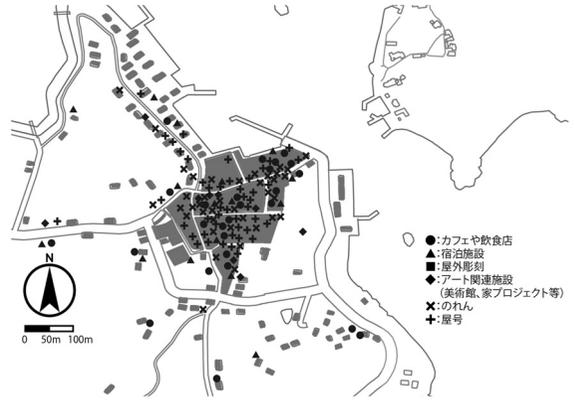


Fig. 1 Distribution of restaurants and lodging facilities in the Honmura area

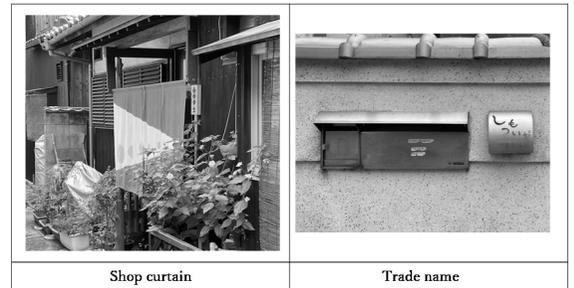


Fig. 2 Shop curtains and names in the Honmura area

数多くの屋外アートが設置されている。パブリックアートとして屋外アートが存在するのは、直島南部の地域と、宮浦地区の海の駅「なおしま」周辺である。アートプロジェクトと地域住民の関係の度合いは地区によって異なることがわかる。

### 3. 直島における教育の変遷

#### 3-1. 直島町の教育計画

直島町は古くから幼児教育や、英語教育に力を入れてきた。就学前における幼児教育の充実をはかるため、特に要望の強かった社宅地区を重点対象に、昭和 30 年 5 月 2 日、鷲ノ松の直島製錬所所有地を借用し、一年保育の直島幼稚園を開園した。その後昭和 34 年 4 月に初当選した三宅親連元町長の政策により、大きく変化した。

昭和 35 年度に掲げた、直島を 3 つの地区に分けたうちの、中央部の「住民生活の場」における具体的政策として、「文教地区計画」がある。三宅元町長は「文教地区計画」として、直島保育園と直島幼稚園を「直島幼児学園」として一つにまとめる「幼

保一元化」, および「幼小中一貫教育」を構想した整備を行った。これはその後の直島の教育に大きな影響を与えた。

まず「幼保一元化」に関して, 昭和49年4月1日, 文教地区内に園舎を新築移転し, 全町を対象とする二年保育を開始した。同時に, 幼・保一元化による直島幼児学園の組織の上で本園に位置づけ, 保育所の四, 五歳児を収容して幼稚部と保育部を設け, 午前中, 両者の混合保育を実施する「直島方式」の幼・保一元化を定着させた。この園舎は, 中央の多目的ホールを囲むセミ・オープン教室の配置であり, クラス単位の個別保育から各クラスの交流保育, さらに一斉保育への移行が, 保育単元の時間的な流れの中でスムーズに行えることと, 園舎全体が幼児の心理を配慮した巨大な遊具としての機能を持っており, 多くの建築専門誌で紹介されて, 新しい園舎づくりの一指針となる建築として評価されている。(Table 1)

「幼小中一貫教育」に関して, 教育文化施設を島の中心部に集めた。昭和45年には直島小学校が完成し, 昭和54年には直島中学校が全面改築された。文教地区が作られたことは, 現在の直島の教育において複数の利点をもたらしている。例えば, 高松などでは, ALT1人あたり3校ほど担当することになっており, 一つの学校に週に1~2回しか行くことができず, 授業に加え, 授業の打ち合わせをする時間を取ることができない。一方で, 直島では週に1日幼児学園へ, 残りの4日は小学校と中学校で分けているため, 授業だけでなくミーティングの時間も取ることができている。これは文教地区整備の結果だと言える。

Table 1 Changes in education on Naoshima

年	出来事
1955	直島幼稚園開園
1959	三宅親連町長, 初当選
1960	文教地区計画, 幼保一元化, 幼小中一貫教育の開始
1970	直島小学校校舎完成
1974	文教地区に園舎を新築移転 二年保育の開始により, 幼保一元化の定着を図る。
1979	直島中学校改築

### 3-2. 直島小学校と福武財団が連携した学びの場

直島は1988年からイギリスからALTを独自に招致し外国語活動に力を入れている。当時はまだ国のジェットプランがなかったため, イギリスと直接交渉してALTを招聘していた。また直島小学校では毎年11月の末から12月にかけて, 県内外から合わせて40名程のALTを招待し, 小学校第5学年が英語を使って本村地区を案内する『Meet the World』という取り組みを行なっている。この行事では, ALTはボラティアという形で参加しており, 一人当たり交通費5000円を支給している。この費用は直島町の予算として組み込まれており, 小学校の教育としても非常に重要なものであることがわかった。

『Meet the World』は, 現在は仕組みとして安定しているが, 開始当初は県内の知り合いや, 教員のつながりでALTに声をかけ参加人数が少ない状態で始まった。ここ10年では人数も安定し, 30~40人が毎年訪れている。また参加するALTは, ALT同士のネットワークを利用し, FacebookなどのSNSで発信, 招待や紹介をしていることがわかった。参加に際して, 直島に泊まって行く先生も多く, 観光業の一端も担っている行事でもある。<sup>注4)</sup> この行事に向け, 直島小学校は福武財団と協力した教育の場を毎年設けている。毎年, 小学校第4学年が本村にある家プロジェクトについて, 小学校第6学年が李禹煥美術館について, 福武財団からサポートを受けて総合学習を行っている。福武財団は本村の家プロジェクトについての説明, 李禹煥美術館の休館日を利用したワークショップの開催などを行う。<sup>注2)</sup> この2つは, 直島小学校では総合的な時間と, 英語教育に関連した「素材」について学習するという活動になっている。つまり, 小学校第4学年次に家プロジェクトのことを勉強し, それを小学校第5学年次に英語で発信することが最終目的となっており, 学年を超えてアートと外国語教育を結び付ける取り組みである。<sup>注4)</sup> (Fig.3)

コロナ禍では対面で開催することが難しく, オンラインでの交流に留まっていたが, 2022年より直島現地での再開が決まった。内容としては, 午前中は小学校第1~4学年が学年ごとにALTと活動したり, 異学年交流会を行なったりする。午後は小学校第5学年が本村地区の家プロジェクトの紹介, 小学校第6学年~中学校第3学年がベネッセハウスミュージアムや, 屋外アートの紹介を行う予定であ

る。

直島小学校は、1994年に文部省指定研究開発学校として英語学習の研究を開始した。また文部科学省の研究開発を2回受けた経験があり、令和4～6年度には3回目の文部科学省特定教育課程特例校として研究をしている。令和4年度に発表された研究概要を見ると、小学校第1～2学年では「外国語活動」、小学校第3～5学年では「外国語」前期、小学校第6学年～中学校第3学年では「外国語」後期としている。小学校第1～5学年を前期、小学校第6学年～中学校第3学年を後期とした、小中連携のカリキュラム設定を行っている。

他にも、外国語教育に関しては、2005年に福武教育振興財団より英語教育重点地区・校として3年間の研究指定を受け、2007年には福武財団教育振興財団助成による英語教育研究発表会を開催している。福武財団による教育支援が、アート教育にとどまっていないことがわかる。(Table 2)

アート教育や外国語教育の他にも、直島小学校と福武財団は協力し、様々な教育の場を作っている。ベネッセの全国展開を視野に開発している教材を、キッズプログラムとして直島小学校の子どもがプロトタイプとして利用したり、直島小学校側が教育として行いたいワークショップに関して福武財団に相談し、講師を紹介してもらったりなど、お互いに協力している関係性が見られた。<sup>注4)</sup> (Fig.4)

### 3-3. 直島小学校の主体性を育む教育

規模の小さな小学校としての特色を生かすために、児童の状況に応じた個別の対応や、個別の児童との対話に基づく、主体性を育む教育を行っている。

転校に関して、小学校側としても柔軟な受け入れ体制を取っており、特別支援学級を2クラス開設している。2020年度に知的障害を対象としたクラスを新設し、2021年度より病弱・身体虚弱を対象としたクラスを新設した。2021年度に開設した特別支援学級は、転入生に対応したものになっている。「北海道から直島に引っ越したいが、子どもが病弱なので心配だ」と、直島小学校に直接電話での問い合わせがあり、転入する前年の夏に一度直接直島小学校で話し合いをし、町の教育委員会から許可を得て新設に至った。<sup>注4)</sup> 令和4年度の直島小学校教育方針には、「特別支援教育の推進」と記述があり、個に応じた指導の充実を意識している。

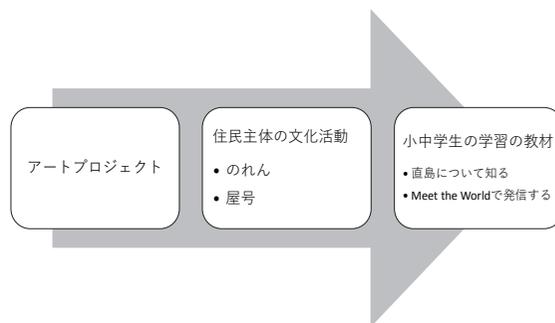


Fig. 3 Benefit derived from art projects

Table 2 Changes in foreign language learning at Naoshima Elementary School

年	出来事
1988	外国語指導助手を招聘し、英語教育を開始
1994	文部省指定研究開発学校として、小学校における外国語学習の研究を開始 (-1996)
2002	文部科学省指定研究開発学校として一部5・4制を取り入れ小中一貫教育研究を開始 (-2004)
2005	福武教育振興財団より英語教育重点地区・校として3年間の研究指定を受ける (-2007)
2007	福武教育振興財団助成による英語教育研究発表会を開催
2009	文部科学省指定を受け、外国語活動における教材の活用と評価の在り方に関する研究を報告
2011	文部科学省指定研究開発学校として教科「外国語」の研究を始める (-2013)
2015	文部科学省教育課程特例校として教科「外国語」の研究を開始 (-2017)
2022	文部科学省指定教育課程特例校として教科「外国語」の研究を開始 (-2024)



Fig. 4 Synergy between foreign language activities and Fukutake Foundation Support at Naoshima Elementary School

他の小学校との違いとして、直島小学校は非常に穏やかということを挙げていた。以前教頭を務めていた小学校では、登下校中や授業中の生徒の大きな声などを聞いたことがあるが、直島小学校では聞いたことがないという。裏を返せば、表現したり感情を出したりする場が少ないのではないかと考えていた。『Meet the World』は、自分から発信する場として効果的であると考えられている。実際に榎校長先生（2021年度当時）は、子どもたちが直島を訪れた観光客に対して話しかけている場面を見たことがあるという。拙い英語だが、子どものやっていることとしてプラスに受け止め、英語をフォローしたり、盛り上げたりしてくれる人もいるという。そのような経験は子どもたちにとって自信になっている。またこのように自ら英語で話しかけるきっかけとして、『Meet the World』や、外国語活動に昔から力を入れて取り組んでいることが起因していると考えられる。<sup>注4)</sup>

また保護者の学校に関する情報不足を解決することも必要だと考え、情報発信に関する取り組みを行っていた。その一つとして、学校のホームページにブログを記載し、保護者へリアルタイムでの学校の情報発信が挙げられる。加えて、「学校だより」として学校の情報を記載したチラシを郵便局や公共の施設に貼ることで、生徒の家庭だけでなく地域の住民、特にデジタル機器を使えずブログを読むことが難しいであろう高齢者の方々にも発信するようにしているという。<sup>注4)</sup>

その他の直島小学校の特徴として、毎年1~2人程三菱マテリアルの転勤で転校生がいるということが挙げられた。直島本島には高校がないため、中学校への転校はあまりないが、小学校への転校は多いという。転勤という形で転入してくる家庭は、永住という考え方をしているケースは少ないと感じている。一方で、瀬戸内国際芸術祭などをきっかけに移住してくる家庭は、カフェなどの飲食店を出す場合が多く、地元で馴染んでいこうという考え方をしていることが多い。故に、地元の住民との繋がりを作ろうと、学校行事に意欲的に参加する家庭が多いという。<sup>注4)</sup>

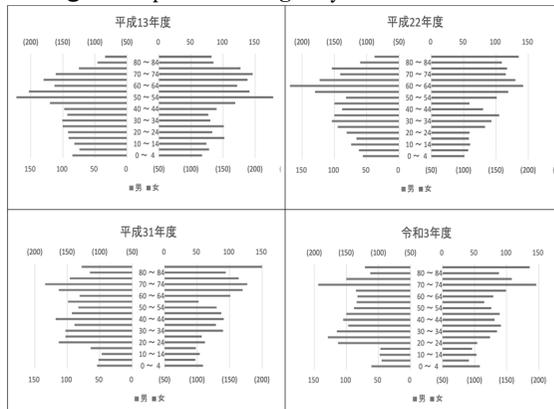
## 4. 移住者による取り組みと行政との協力

### 4-1. 移住者が感じた直島の子育て環境の課題

直島では、瀬戸内国際芸術祭などベネッセアートサイト直島の影響を受け、移住者が増加した。瀬戸内国際芸術祭での経済効果を見込んでカフェなどの飲食店を開業する人や、自然が多く、アートが身近にある環境での子育てを望んだ、中学生までの子ども連れの家庭が多い。直島は海外でもアートの島として有名であるので、海外から移住する人もいるという。自然が多く、のんびり暮らすことができ、子どもものびのびできる一方、人の出入りも多く刺激もある直島は、都会でも実家のある地元でもないが、移住する意味のある場所として移住先に選択されることが多い。<sup>注3)</sup> また、三菱マテリアルの社宅団地が島の北部に3ヶ所ほどあり、全部で50~100世帯ほどが居住している。その三菱マテリアルの勤務者の年齢層が30代前半で、保育園・幼稚園の年頃の子どもの持つ子育て世代が多い。過疎地域ながらも、子どもの数が多い土地として子育てに適した移住先だと判断する人も多いのだという。<sup>注3)</sup> 直島の年齢別人口を見てみても、中高生の人口よりも保育園・幼稚園の年齢の子どもたちの人口の方が多いことがわかる。(Fig.5)

一方で、直島には高校がないことから、子どもが中学生になる前に受験などを加味し、直島から転出する家庭も少なくはないという。ただ、瀬戸内海は海が穏やかで欠航が少ないことから、直島から香川県や岡山県の高校に通学する学生や、習い事を香川県や岡山県までしに通っている子どもも数多くいる

Fig. 5 Population changes by class on Naoshima



とのことである。<sup>注3)</sup>

以前にはその他にも、直島での子育て環境について問題点が存在した。以前の直島は、認定こども園「直島幼児学園」が17:30までしか開いておらず、土曜日は開いていなかった。これは月曜日が休館日の美術館や、土日も仕事が休みでないホテルや三菱マテリアル中の食堂や清掃などの職業に就いている子育て世代の人たちには非常に不便なことであった。また子育て世代が子どもを預けることができないことで、丁度30代前半の働き盛りの女性が十分に働くことができず、女性の中堅が育たない問題につながると山岸氏は言う。<sup>注3)</sup>

#### 4-2. 住民主体で行った子育て環境の改善

このような、特に保育園・幼稚園の年頃の子どもにおける子育て環境の問題点を実際に経験した山岸氏は、問題解消のための団体「なおしまキッズポート」を直島町役場に提案した。人口減少と少子高齢化の観点から「親子の学びと交流を軸とした移住定住支援」として、事業を展開することを目的とし、キッズポートが直島の安心・魅力の一つとなり、移住定住促進にも繋げることを意図している。

キッズポートでは、平日18:00までと、土曜日にも開館し、直島から子育て世帯が転出するという従来の問題を解決しただけではなく、保育の場としてだけでなく、親子交流の場という役割も果たした。具体的には、乳幼児を対象とした交流支援、子育て

相談、子育て関連の情報提供をはじめとしたサポートを行った。他にも、子育て世帯の移住希望者の相談にも乗るなど、移住者、地元住民関係なく、出産～小学生までの子育て世帯の定着を目指した活動を行っている。直島の子育て環境の改善及び、直島への移住促進にもつながった。(Fig.6)

キッズポートの設立に際し、直島小学校の教室を使えないかという相談を山岸氏から受けたが教室に空きがなく、直島町総合福祉センター内に設置されることが決まった。<sup>注4)</sup> 福祉センター内は小学校と異なり、いろいろな時間帯に様々な人が利用するため地域住民の目に入りやすいことなど、利点が挙げられた。<sup>注4)</sup>

このように移住者が移住先での住民支援制度を整える活動を行なっていること、行政や、小学校もそれを支援していることは直島のまちづくりの特徴であると言える。

#### 5. プロジェクトの相互作用

直島ではアートプロジェクトを契機に、地域住民の文化活動が活発した。また三菱マテリアルも直島の経済や人口維持を支える要であることに加え、瀬戸内国際芸術祭などアートプロジェクトの開催により流入人口が増加し、移住者希望者が増加した。これに対し、小学校、住民や移住者が主体となって、柔軟な子どもの受け入れ及び移住者の受け入れの効率化を図った。このように、移住者が移住先での住

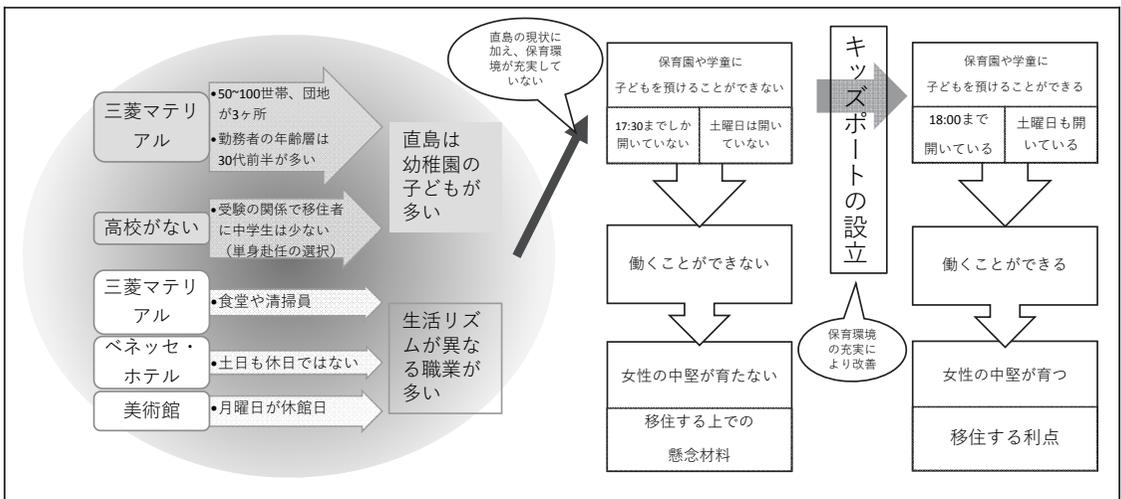


Fig. 6 Problems on Naoshima to be eliminated by the establishment of the Kids Port

民支援制度を整える活動を行なっていることは、直島のまちづくりの特徴と言える。また直島小学校・中学校では、従前から取り組んでいる外国語教育の教材としてアートプロジェクトを利用したり、福武財団と協力して様々な学びの場を設けたりしている。

このような直島のまちづくりの背景には、単に福武財団を中心としたアートプロジェクトが持ち込まれたことだけでなく、従前から人口維持を担っている企業が存在すること、従前から行っていた学校教育や、小さな自治体である利点を生かして行政が住民の意見を気軽に取り入れながら町政を柔軟に行ってきたという姿勢があり、住民が主体的に地域の改善に係る素地があったことが、アートプロジェクトを通じた地域独自の活動が展開していることがわかった。全国各地でアートプロジェクトとまちの活性化を結び付けた取り組みが展開しているが、それを成功に導くためには、受け入れる地域の住民と行政の持っている力や取り組み姿勢と、相俟ってプロジェクトが進められることが重要である。

#### <注>

- 1 本村ラウンジ&アーカイブのスタッフへ、2022年8月20日のヒアリング調査より。
- 2 公益財団法人福武財団アート部門エデュケーション担当の藤原氏へ、2021年6月26日のヒアリング調査より。
- 3 一般社団法人キッズポート代表理事山岸氏へ、2021年6月27日のヒアリング調査より。
- 4 直島小学校校長である榎校長（2019-2021年度在職）へ、2021年6月28日のヒアリング調査より。

#### 参考文献

- 1) 直島町史[通史本編], 1990年
- 2) 直島町史 続編, 1990年
- 3) 香川県景観形成指針(資料編), 2017年
- 4) 秋元雄史: ディスカヴァー・トゥエンティワン直島誕生: 過疎化する島で目撃した「現代アートの挑戦」全記録, 2018年
- 5) 秋元雄史, 安藤忠雄[ほか]: 直島瀬戸内アートの楽園, 2006年
- 6) 中村有理沙, 土肥真人: 日本におけるアートプロジェクトの実態と主催者の意識構造コミュニティ側とアート側の意見に注目して都市計画論文集 2013年 48巻3号 237-242, 2013年
- 7) 岡本直行: 野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について(1) —パブリックアートと空間の関わりから— 新見公立大学紀要 2018年 38巻2号 89-94, 2018年
- 8) 児玉周丈: 2015年度事例研究現代行政 I 最終レポート 直島における地域活性化の事例研究, 2015年
- 9) フンク・カロリン: 直島におけるアート・ツーリズムの発展と観光者の特徴 2014年度日本地理学会春季学術大会, 2014年
- 10) 高見澤なごみ, 古田賢, 枝木妙子, 永井彩子, 後山剛毅: 研究ノート(紀要論文)ベネッセアートサイト直島における直島らしさの形成をめぐって Core Ethics: コア・アシックス 2016年 12巻 331-341, 2016年
- 11) 清水李太郎: アートサイト直島にみる社会的広域圏形成プロセスの展開, 2017年
- 12) 宮本結佳: 住民の認識転換を通じた地域表象の創出過程 ~香川県直島におけるアートプロジェクトを事例にして~, 2012年
- 13) 八島明朗, 守口剛, 恩藏直人, 松本大吾, 石田大典, 石井裕明: 現代アートの島「直島」~非日常性と経験価値のインタラクション~ [直島], マーケティングジャーナル 2012年 31巻 4号 110-124, 発行日: 2012/03/31
- 14) 令和4年度直島小学校教育方針, 直島町立直島小学校公式サイト
- 15) 文部科学省指定教育課程特例校としての研究概要(令和4年度~), 直島町立直島小学校公式サイト
- 16) 直島小学校沿革概要, 直島町立直島小学校公式サイト